

「ヤコブの殺害とペトロの投獄」

2024年02月23日

その頃、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、さらにペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神に献げられていた。

(使徒12：1～5)

この頃、ヘロデ・アグリッパがパレスチナ全土の領主(王)であった。彼の祖父はヘロデ大王で、叔父がヘロデ・アンティパスである。ヘロデ大王は35年間、ユダヤに君臨し、エルサレム神殿や多くの建造物を建てた有能な王であった。しかし、猜疑心が強く、権力に異常に固執する人で、身内の者さえ何人も殺害している。彼の権力への妄想が、イエスが生まれた時、新しい王の誕生と聞き、自分以外の王は許せないと、ベツレヘムで2歳以下の男児を殺害したという物語を生み出している。ヘロデ・アンティパスは主イエスと同時代の領主で、兄弟の妻ヘロディアと結婚したことを、洗礼者ヨハネから律法違反と抗議され、怒って投獄した。彼の誕生祝いの席上で、余興のようにヨハネを斬首した。主イエスの活躍は、自分が斬首したヨハネの生まれ代わりであると恐れた。彼は、総督ピラトから送られた主イエスを尋問するが、無罪と知りつつ、何もできずに送り返している。

ヘロデ・アグリッパは使徒時代の領主で、民衆から律法と神殿を蔑ろにすると非難されていた教会に迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを殺害した。いつの時代も、権力者は反抗する者、意に沿わない者を葬り去ることを当然としている。キリスト教史の中では、ステファノが最初の殉教者であるが、使徒たちの中では、ヤコブが最初の殉教者である。

ヤコブは弟ヨハネと共に、主イエスに招かれ、弟子となったガリラヤの漁師であった。主イエスを尊敬し、従っていたが、主イエスの思いを理解していなかった。主イエスが先頭に立ち、毅然とエルサレムに上るのを見て、ローマ支配から独立する革命を起こし、王になれると期待した。その時、ヤコブ、ヨハネ兄弟は、他の弟子たちを出し抜いて、高位に着けるように願い出た。主イエスは「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっていない。この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることができるか」と言われと、二人は「できます」と、高位が得られるなら、どんな苦難も耐えますと答えている。二人はこの世的な野心を持っていた。主イエスは二人に、「確かに、あなたがたは、私が飲む杯を飲み、私が受ける洗礼を受けることになる」と言われた。ヤコブは復活した主イエスに出会ってからは、使徒としての活躍はしたのであろうが、使徒言行録は、彼の働きについては全く記していない。主イエスが言われた通り、主イエスが受けた十字架の杯を、ヘロデ王から殺害されるという苦い杯をヤコブは飲むことになった。

ヘロデは、ヤコブの殺害が民衆に喜ばれたのを見て、ペトロをも捕えようとした。時はイスラエルの最大の祭、除酵(過越)祭であった。ヘロデはペトロを捕え、投獄し、四人一組の兵士四組、16人の兵士たちに引き渡して、嚴重に監視させた。過越祭の時には、処刑は避け、祭が終わった時、民衆の前に引き出し殺害し、民衆からの支持を得ようと考えていた。エルサレム教会の信者たちは、ペトロが投獄されたことに心を痛み、無事の釈放を願って、熱心な祈りを献げていた。